

# エジプトアラビア語における動作主の 脱焦点化について

エバ・ハッサン<sup>†</sup>

キーワード： 動作主の脱焦点化、et-接辞構文、  
不特定動作主構文、受動分詞構文

## 1 はじめに

本稿では、エジプトアラビア語（以下ではEA(Egyptian Arabic)と略す）において動作主を脱焦点化(Agent Defocusing)する構文の振る舞いを考察し、これらの構文の特徴や制約、共通点及び相違点を分析する。本稿の意義・目的は以下のようにまとめられる。

- EAはこれまであまり言語学の分析対象として取り上げられてはならず、動作主の脱焦点化機能を持つ様々なEAの構文について、意味論的観点から一般化を図るのは初めての試みであると思われる。
- 動作主の脱焦点化は「受動／受身」という現象の普遍的な機能(Shibatani 1985, Lyons 1968)とされてきたが、EAを考慮しながら観察することで、より脱焦点化についてより精緻な記述が可能となる。

---

<sup>†</sup>東京大学大学院総合文化研究科博士課程

動作主の脱焦点化(Agent Defocusing)とは、事象における動作主が持つ、認知的・意味的な際立ちが抑制される現象を指す。動作主の脱焦点化はこれまで、「受動構文」が持つ普遍的な機能として広く一般的に認識されている(Shibatani 1985, Lyons 1968)。

本稿では、EAにおける動作主の脱焦点化を、単に受動態という文法カテゴリーの下位部類として扱うのではなく、統語および意味の2つの観点における特徴的な現象を分析し、新たな位置づけを行うことを試みる。そして、EAにおける動作主の脱焦点化では、動詞が、動作主の存在を前提とするイベントをエンコードしているにもかかわらず、焦点化の対象ではなくなり際立ちを失うことで、統語的に表示されない。こうした動作主の脱焦点化を実現する構文には三種類のものがある。(i)1つは、能動態の動詞を用いた構文で、動作主が不特定化されることで脱焦点化が行われる。この構文は、動詞の形態が三人称複数を示しているにもかかわらず主語が表示されないため、本稿では「不特定動作主構文」と呼ぶことにする。(ii)もう1つは、EAの受動構文である。EAの受動構文では、他動詞から自動詞を派生させる接辞*et-*が用いられる。この接辞を使った受動構文を*et-*受動構文と呼び、「事象発生及び主題の変化」を焦点化する機能を持つ。(iii)最後の構文は受動分詞である。受動分詞は、主題の現在の結果状態を焦点化する機能を持ち、その結果、動作主は脱焦点化される。

## 2 EAにおける動作主の脱焦点化

Lyons (1968)とShibatani (1985)は動作主の脱焦点化を、「受動態」と密接に関係した現象として捉えている。Lyons (1968: 376)は能動構文と受動構文の対応について、(i)能動文の目的語が対応する受動構文の主語になる、(ii)能動態の動詞は受動態の動詞より基本的である、(iii)受動構文では能動文の主語を表す必要はないと、述べている。

また、受動化の普遍的な特徴として、「文を動作主無しで表すことが可能になる」と述べている(Lyons 1968: 378)。

‘If there is any one function that is common to the passive in all the languages that are customarily said to have a passive voice (abr.), this is that it makes possible the construction of ‘agentless’ sentences: Bill was killed.’

一方 Shibatani (1985) は、受動構文の持つ機能的側面に焦点を当て、受動構文およびその関連構文が持つ包括的な特徴を提示し、それまで機能主義が主張してきた題目化 (Topicalization) とは異なる視点から考察を行った。そして受動構文は動作主を巡る言語的現象であり、その機能は、動作主を脱焦点化することにあることを主張した。彼はその証拠として、自動詞が非動作主項を取っている場合、そして他動詞が動作主ではない主語を取る場合に、受動化ができないことを挙げている。Shibatani (1985: 831-2) は以下のように主張している。

‘...passives center around agents, and their fundamental function has to do with the defocusing of agents.[...] Unfortunately, no term other than ‘agent defocusing’ covers all these phenomena (passive and related constructions) which, I claim, are functionally related.’

EA の受動構文にもこのような動作主脱焦点化の現象を認めることができるが、後で見るように、脱焦点化の度合いにおいては相違が見られる。3 節以降、こうした現象が見られる不特定動作主構文、et-受動構文そして受動分詞構文について考察する。

### 3 不特定動作主構文

#### 3.1 不特定動作主構文の特徴

不特定動作主構文については、これまで体系的な研究が存在しない。この構文は以下の特徴を持つ。

- 1) 動詞は能動態を取り、2) 動詞の形態は三人称複数の主語を表示し、  
 3) 三人称複数の不定代名詞は主語として表現されず、4) 意図的な人間のみが動作主として解釈される。(1)の例を見てみよう。

- (1) a *bey-darabu*                    *'ali fil-madrasa*  
 imper.prog-hit.3pl.pst    Ali    at.def-school  
 直訳：(彼らがいつも) 学校でアリーを殴っている。  
 意訳：アリーは学校で (いつも) 殴られている。
- b *hazza'u*                    *hosna fis-šoġl*  
 insult.3pl.pst    Hosna    at.def-work  
 直訳：(彼らが) 職場でホスナを叱った。  
 意訳：ホスナは職場で叱られた。
- c *wa'a'u*                    *el-yafta fel mat'am*  
 drop.3pl.pst    def-sign    at-def    restaurant  
 直訳：(彼らが) レストランで立て看板を倒した。  
 意訳：レストランの (前にある) 立て看板が倒された。

### 3.2 不特定動作主構文と動作主性

不特定動作主構文は、3.1に示した特徴のほか、下記の文法的制約を持つ。

- 1) 動作主の領属性を示す語句が必要となる。

通常の場合、事象の発生場所や動作主の所属を表す場所句が文中に要求される。例えば(1a, b, c)の例では、それぞれ「学校で」、「会社で」、「レストランに/で」という場所句を持つ。

これらは事象が発生した場所であり、また動作主が所属・関係する場所でもある。この場合の動作主は不特定の存在として解釈される。

- 2) 動詞形態は、三人称複数主語を表示するが、実際の動作主は一人であっても複数であってもよい。

例文(1a)および(1b)の動詞、*darabu*「(彼らが) 殴った」と *hazza'u*「(彼らが) 叱った」の主語は、動詞形態上は三人称複数だが、それは現実世界の動作主の人数と関係なく、一人の場合でも同じ形で示される。

3) 潜在的に含意される動作主は人間としての解釈しかない。

(1c)では人間である動作主が潜在的に含意されており、看板が自ら倒れた、または、動物などが倒したという解釈は成立しない。ただし、この構文では、三人称複数の不定代名詞を文中で表現してはいけないという制約がある。つまり動詞の形態は三人称複数形の主語を表わしていても、三人称複数の不定代名詞が統語的に実現された時点で通常の能動文となる。次の例文を見られたい。(2a)は前出の(1a)を再掲したものである。

(2) a *darabu*        *'ali fel-madrasa*

hit.3pl.pst    Ali    at.def-school

直訳：(彼らが) 学校でアリーを殴った。

意訳：アリーは学校で殴られた。

b *homma*        *darabu*        *'ali fel-madrasa*

3pl.nom        hit.3pl.pst    Ali    at.def-school

彼らは学校でアリーを殴った。

(2a)と(2b)は、三人称複数の不定代名詞が主語として現れている点で異なる。いずれも能動文であるが(2a)は動作主が脱焦点化されているが、一方の(2b)では通常の能動文として特定の動作主を明示している。

### 3.3 不特定動作主構文による動作主の脱焦点化及び行為連鎖

本節では、不特定動作主構文の特徴から見た、動作主の脱焦点化について考察する。不特定動作主構文は、形式的に能動態を取り、動作主の存在を含意する副詞を文中に要求する。例文(3)を見てみよう。

(3) a *ḍarabu*      *`ali fel-madrasa fesser*  
hit.3pl.perf. Ali at.def-school secretly

直訳：(彼らは) 学校でアリーをこっそりと殴った。

意訳：アリーは学校で誰もいないところで殴られた。

b *wa'a'u*      *el-yafta fel mat'am bel- 'ašd*  
drop.3pl.perf. def-sign at-def restaurant intentionally

意訳：レストランで立て看板が意図的に倒された

直訳：(彼らは) レストランの (前にある) 立て看板を意図的に倒した。

例文(3a)では、*fesser*「こっそりと(secretly)」が用いられている。この副詞は、動作主の行為様態を描写するため、潜在的な動作主の存在が前提となる。

同様に(3b)でも*bel- 'ašd*「意図的に(intentionally)」によって意図的な動作主が存在することが示唆されている。このように、不特定動作主構文では、行為者の存在が暗示されるものの、その行為者を不特定化することで脱焦点化が行われている。この構文では、対象の結果状態は必ずしも含意されなくてもよい。例文(4)を見てみよう。

(4) a *'a'adu*      *yzo'o*      *el bāb,*  
continue.3pl.perf. push.3pl.imperf. def door,

*bas ma et-fataḥš*

but neg. Intr-open.3sing.fem.perf.neg

ドアが押されたが、開かなかった。

b *'a'adu*      *yzo'o*      *el bāb*  
continue.3pl.perf. push.3pl.imperf. def door

*we aḥiran etfataḥ*

and finally intr-open.3sing.fem.perf.

ドアは押されて、やっと開いた。

不特定動作主構文である(4a)では、従属節に *bas ma-fatahsh* 「開かなかった」とあることから *bab* 「ドア」に変化が生じなかったことが分かる。一方(4b)は結果句でドアが開いたことが明示されているため、ドアが状態変化を被ったことが分かる。このように不特定動作主構文は、行為の結果に関心がない。

この構文では、結果性は含意されず、また主語も統語的に明示されず、高い際立ちを持つ単独項が存在しない。この構文はあくまで、「意図的な動作主による行為」に際立ちを与える、と考えることができる。つまり、不特定動作主構文では、動作主を不特定化することで脱焦点化を行い、動作主の存在を強く含意しながらも、最も高い際立ちは、図1に示すように、行為連鎖(Croft 1991)における「行為・動作」のセグメントに与えられる。

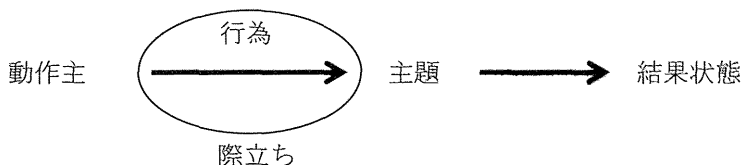


図1：不特定動作主構文と行為連鎖

本構文は、能動態のヴォイスを持ち、意図的な人間としての動作主を取り、動作主の領属性を示す場所句が付加される、という特徴を持つため、自然発生的な状態変化イベントを表すのではなく、あくまで動作主の存在や意図性が前提とされた行為が表現されている、と考えるべきである。

以下、動作主不特定構文の意味的特徴を下記にまとめる。

#### (5) 動作主不特定構文の意味的特徴

- i. 動作主の脱焦点化によって「行為」セグメントに際立ちが与えられる。
- ii. 行為には主題の状態変化を引き起こす使役性が要求されない。

iii. 主題の結果状態は必ずしも含意されない。

## 4 et-受動構文における動作主の脱焦点化

EAのet-受動構文では、接頭辞であるetが付加された動詞が用いられる。この接頭辞はさまざまな他動詞に付加され、生産的に自動詞を派生<sup>1</sup>させる。それと同時に、この接辞の付加によって受動的事態を表現できることから、この受動構文をet-受動構文と呼ぶ。

本章では、et-受動構文を扱い、受動化に付随して起きる動作主の脱焦点化の文法的特徴について探る。まず受動構文を扱った先行研究およびそれらの問題点を取り上げた上で考察を行う。

### 4.1 et-受動構文の先行研究—Watson (2002)

EA のヴォイスを扱った研究は極めて少ない。et-接辞の研究もあまり進んでおらず、2件の先行研究があるのみである。これらの研究では、EAのet-接辞は他動詞に付加され、受動態を派生させるとされている。

Watson (2002: 140)は、SA<sup>2</sup>のVII形動詞は、en-接辞という自動詞派生接辞によって派生されるが、この接辞に対応するEAのet-接辞は、主に受動として使われる、と述べている。

‘Form VII common in Cairene but relatively rare in San’ani, usually indicates passive or middle voice, as in san’ani *shaghal* ‘to work’, *nshaghal* ‘to be occupied’; *gadaa* ‘to pay a debt’, *ngadaa* ‘to be finished’, and in cairene *kasar* ‘to break’, *tkasar* ‘to be broken’; *xada3* ‘to trick’, *nxada3* ‘to be tricked.’”

<sup>1</sup>et-接辞は、他動詞ばかりでなく、非能格自動詞(*meshi*「歩く」、*geri*「走る」)のような活動を表す自動詞)にも付加される。この場合、イベントにおける動作主の参与がキャンセルされ、文はイベントの発生のみを表現するものとなる。

<sup>2</sup>Standard Arabic の略。



Watson は、en-接辞によって派生された SA の VII 形動詞は、EA だけではなく、その他のアラビア語方言においても受動構文で用いられる、と述べている。

また、その使用状況や使用頻度は方言によって異なるとしているが、Watson の研究は主に音声・形態論に焦点を当てたもので、et-接辞を含むヴォイス現象に関する詳しい文法的記述はなされていない。そのため、SA の VII 形と et-接辞の関連性についても言及はない。

#### 4.2 Abdel Massih (1979)

Abdel Massih (1979) は EA の文法を記述した文法書としての定評の高い文献である。EA の受動態や et-接辞に関する文法的特徴も記述されている。この文献では et-接辞による派生動詞を用いた構文は受動構文として扱われている。Abdel Massih (1979: 189) では受動態の意味特徴として、1) 「動作主が知られていない」、2) 「動作主は隠されている」、3) 「動作主は明白な要素で、わざわざ述べる必要はない」、という 3 つの点が挙げられている。また、受動構文では英語などと異なり、意味上の主語つまり動作主がエンコードされないとし、Shibatani や Lyons が考える Agent defocusing に近い主張をしている。

また、受動化が可能な動詞として、他動詞のほか、行為対象を示す前置詞句を伴う自動詞も挙げている。特にこうした受動化が可能な自動詞の場合、前置詞句の目的語が行為の「受け手」<sup>3</sup> (つまり行為が向けられる対象物) でなければならない。この例を(6)に示す。(6a)は能動態自動詞文、(6b)は派生した受動文である。

- (6) a Fariid 'a`ad 'a kkursi 一能動態自動詞文  
 Farid sit.3sing.ml.perf. on def.chair  
 ファリードは椅子に座った。

<sup>3</sup>Abdel Massih は、二重目的語構文の間接目的語ばかりでなく、行為の対象にも同じ「受け手 (recipient)」という用語を用いている。例えば「座る」という行為では、「椅子」がその受け手に当たる。

b Elkursi et-'a`ad `aleih 一受動文

Def.chair intr.sit.3sing.ml.perf. on.it

直訳：椅子は座られた。

意訳：何者かが椅子に座った。

Abdel Massih は、例文(6b)では前置詞句の名詞 *kursi* 「椅子」が 'a`ad 「座る」という行為の受け手と解釈できるため受動化が可能である、と説明している。またこうした自動詞が行為の受け手を取れない場合には受動化ができないとも述べている。実際、(7a)のように行為の受け手を取れない自動詞は受動化ができない。

(7) a ali rege` ba`d illigtimaa` 一能動態自動詞文

Ali return.back.3sing.ml.perf. after def.meeting

アリーはミーティングの後に戻ってきた。

b \*et-rege` ba`d illigtimaa` 一受動文

intr-return.back.3sing.ml.perf. after def.meeting

\*ミーティングの後に戻られた。

動詞「戻る」は移動の着点は取れるが行為の対象としての「受け手」を取ることはできない。そのため(7b)は非文となる。

こうした Abdel Massih の指摘は受動化制約を考察する上で極めて重要なものではあるが、2つの疑問点について十分な説明がなされていない。それはまず、et-接辞で派生される受動構文の意味特徴と(7b)のような受動化制約との間にどのような文法的な関連性があるのか、という点である。EAにおける受動構文の機能は、i) 動作主が知られていない、ii) 動作主を隠す、iii) 動作主は明白な要素で、わざわざ述べる必要はない、とされるが (Abdel Massih 1979)、受動化が行われる場合に、目的語がなぜ行為の「受け手」として解釈されなければならないのかは不明なままである。

第二点として、どのような意味特徴を持った動詞が et-接辞による受動化の対象となるのかも述べられていない。実際、行為の「受け手」を取らない自動詞でも受動化が可能な場合がある。この例を(8)に示す。

(8) Howa masrah elgalaa' da y-et-rah ezzai?

This theater elgalaa this imperf.ml-intr.-go.3sing.ml. how

直訳：ガラー劇場はどうやって行かれるのか？

意訳：ガラー劇場にはどうやって行けばよいか？

(Twitter での書き込み)

(8)の「行く」のように、影響を被る目的語や行為の「受け手」を取らない典型的な自動詞にも et-接辞を付与できる場合があり、とても自然な発話である。

これに対し Abdel Massih は下記のように et-接辞で受動化できない動詞の例を挙げている。

(9) 受動化できない動詞の例<sup>4</sup>

能動態	意味
Iḥtaram	to respect
Ixtaar	to choose
Ista`mel	to use
Istaḥmel	to bear
Istanna	to wait
Eḥtall	to conquer

確かにこれらの動詞は et-接辞による受動態はできないが、その理由について何も述べられていない。

以上、本節では先行研究を紹介し、その問題点を検討した。次節 4.3 では、et-接辞による受動構文の文法的制約についてさらに考察を深める。

<sup>4</sup>Abdel Massih は最初の 3 つの動詞を挙げているだけで、その他の動詞は著者によるものである。

### 4.3 SAのen-接辞とEAのet-接辞

本節ではまず、EA の et-接辞と、その源流である SA の et-接辞の共通点と相違点について触れておく。

SA では発音が異なり/et/ではなく/en/と発音され、用法にも違いがある。en-接辞には、他動詞を自動詞に変える働きがあるが、受動構文として用いられることはできない。(10a)のように、この接頭辞を動詞に付加することによって自動詞が作られる。これには受動化の機能はなく、SA の受動態は(10b)のように全く異なる操作で作られる。

(10) a en-fataḥ-a	al-bāb-u	—自動詞構文
intr-open.3sing.ml-pst	def-door-nom	
ドアが開いた。		
b futiḥ-a	al-bāb-u	—受動構文
open.pass.3sing.ml-pst	def-door-nom	
ドアが開けられた。		

(10a)では「開ける(open)」に当たる他動詞*fataḥa*の語頭にen-が付与され、自動詞形が派生されている。一方、(10b)では他動詞*fataḥa*が母音変化によって動詞の受動態が作られる。

SAでは、en-接辞によって他動詞から派生した自動詞は、「ひとりで、ある状態になる」という意味を表す。(11)の表の例を見てみよう。

## (11) SA の他動詞と en-接辞で派生した自動詞

他動詞	自動詞	受動態
<i>fataha</i> 「開ける」	<i>en-fataha</i> 「開く」	<i>futiha</i> 「開けられる」
<i>ghalaqa</i> 「閉める」	<i>en-ghalaqa</i> 「閉まる」	<i>ghuliqa</i> 「閉められる」
<i>seaba</i> 「流す」	<i>en-seaba</i> 「流れる」	<i>suyyiba</i> 「流される」
<i>qalaba</i> 「倒す」	<i>en-qalaba</i> 「倒れる」	<i>quliba</i> 「倒される」
<i>kasara</i> 「壊す」	<i>en-kasara</i> 「壊れる」	<i>kusira</i> 「壊される」
<i>basata</i> 「広げる」	<i>en-basata</i> 「広がる」	<i>busita</i> 「広げられる」
<i>nathara</i> 「散らかす」	—	<i>nuthira</i> 「散らかされる」
<i>raṣṣa</i> 「並べる」	—	<i>ruṣṣa</i> 「並べられる」
<i>ʿallaqa</i> 「(物を) 掛ける」	—	<i>ʿulliqa</i> 「掛けられる」
<i>rattaba</i> 「片付ける」	—	<i>ruttiba</i> 「片付けられる」

(11)の表に挙げられている自動詞は意図性を持たない主語を取る。例えば「物が倒れる」場合、物が意図的に倒れるのではない。外的な使役主による状態変化事象、もしくは主題<sup>5</sup>自体の自発的・内在的な力である状態に変化する事象を語彙化した動詞には、自他のペアが存在し、他動詞から自動詞が派生される。それに対して、「散らかる」、「並ぶ」、「片付く」といった自動詞の表す事象は、主題の内在的な力だけで自然に成立できない。そのためこれらの自動詞は存在せず、受動表現によってのみ表現される。

SA の en-接辞は、音韻的変化を経ただけでなく、自動詞化機能のほかに、受動化機能も獲得した。そのため同じ形態で自動詞と受動態の 2 つの解釈が成立する。

<sup>5</sup> 「主題」とは、他動詞構文における目的語で対応受動文における主語、及び、自発自動詞構文における主語に当たる。

(12) *el-bāb et-fataḥ*

def-door intr-open.3sing.ml.pst

ドアが開いた (自動詞文) / ドアが開けられた (受動構文)。

こうした自動詞文と受動構文の判別には、コンテキストだけではなく、動詞自身の意味も重要となる。外的な原因なしに成立する主題の状態変化事象を語彙化した自動詞を含む、有対動詞、例えば *fataḥ* 「開ける」、*afal* 「閉める」、*ball* 「濡らす」などは、自動詞文と受動構文の判定に曖昧性が生じうる。だが、そうではない動詞、つまり、外的要因による状態変化事象を語彙化した動詞 (通常は自他の対応がない) は、受動構文としての解釈しか成立しない。このような動詞には *sara'* 「盗む」、*ḥatt* 「置く」、*kall* 「食べる」、*madaḥ* 「ほめる」 *sara'* 「盗む」、*akal* 「食べる」、*katab* 「書く」、*šereb* 「飲む」、*lebes* 「着る」などがある。

また、SAでは、十分な前後関係がなければ受動の解釈の容認度が下がるものでも、EAでは、*et*-接辞を用いることで、能動文における主題を受動構文の主語として解釈することが可能になる場合がある。次の(13)を見てみよう。

(13) *el-blūza di et-labaset embareḥ*

def-blouse this intr-wear.pst.3sing.fem yesterday

直訳：このブラウスは昨日着られた。

意識：このブラウスは昨日誰かが着た。

(13)のような文は、SAのみならず、英語や日本語においても受動態としての解釈は不可能である。

(14) a. \*/# My blouse was worn yesterday.

b. \*/# 昨日私のブラウスは着られた。

ではなぜEAではこうした受動態が成立するのだろうか？次の4.4以降、et-受動構文における文法的制約条件を手掛かりとしてこの原因について議論する。

#### 4.4 et-受動構文における文法制約

EAのet-受動構文では、英語や日本語と異なり、動作主を文中に実現させることができない。(15)の例文を見てみよう。

- (15) a *el-korsī et-ḥatt hena*  
 def-chair intr-put.3sing.ml.perf. here  
 椅子はここに置かれた。
- b \* *el-korsī et-ḥatt hena bi- l-`a:mel*  
 def-chair intr-put.3sing.ml.perf. here by- def-worker  
 椅子がここに従業員によって置かれた。
- c \* *el-korsī et-ḥatt hena men el-`a:mel*  
 def-chair intr-put.3sing.ml.perf. here from def-worker  
 椅子がここに従業員に(よって)置かれた。

(15b)では、道具を表す前置詞 *bi* 「で(with, by)」が、また(15c)では、原因を表す前置詞 *men* 「から(from)」がそれぞれ動作主を標示しているが、どちらとも非文となる。だが、さらに細かく観察すると、興味深いことにet-受動構文は、動作主と原因に対して正反対の振る舞いを見せる。

通常EAでは動作主は意図性を持った行為者に限られ、意図性を持たない「原因」は、前置詞 *men*<sup>6</sup>によってマークされる。

---

<sup>6</sup>*men*はSAから入ってきた前置詞で、本来、時間的・空間的起点(日本語の「～から」、英語の‘from’)を表していたが、EAに移入した後、本来の起点表示機能に加え、事象の原因を意味する機能が加わった。*men*が表す原因とは、無生物、自然現象といった動作主性や意図性を持たない主体を指す。

(16)は*men*が有情物をマークする例、(17)は*men*が非情物(動物と無生物)をマークする例である。

- (16) a *el-bāb et-'afal men Tamer*  
 def-door intr-close from Tamer  
 ドアはターメルのせいで閉まった。
- c *el-pantalōn et-ḡasal (\*men mama)*  
 def-trousers intr-wash.pst.3sing.ml (\*from mom)  
 ズボンはお母さんに洗われた。
- (17) a *amiṣ-i et-'ata` men el-mosmar*  
 shirt-poss.1sing intr-tear.1sing.pst from def-nail  
 私のシャツは釘で破れた。
- b *el-'ōda et-wassaḥ-et men el-kalb*  
 def-room intr-dirty.3sing.pst-fem from def-dog  
 部屋が犬のせいで汚れてしまった。(「非意図に」という解釈)
- c *el-laḥma et-takl-et (\*men el-kalb)*  
 def-meat intr-eat.3sing.pst-fem (\*from def-dog)  
 肉は犬に食べられた。

(16a)の*Tamer*(人名)は原因として*men*でマークされており、*Tamer*が非意図的に事態を引き起こしたものとして解釈される。一方(16b)では、動作主の意図性を前提とした動詞 *ḡasal*「洗う」が、非意図的な原因者を示す*men*句の意味と衝突するため非文となる。

一方(17a-c)の外項は、それぞれ、*mosmar*「釘」、*kalb*「犬」である。これらの名詞は(17a, b)では、意図性を持たない原因として解釈されるので適格文となるが、(17c)のように「肉を食べる」行為は意図性を持つ動作主を要求するため、「犬」を文中に表現することはできない。このように、*et*-受動構文では、意図性が主語に対する大きな制約条件になっていることが分かる。



#### 4.5 et-受動の機能と行為連鎖

et-接辞の機能を一般化すると「事象発生・主題の変化・動作主の排除」であり、これはEAにおけるet-接辞の本質的機能と言える。他動詞構文は、事象の起点となる動作主から終点である結果状態までの行為連鎖全体を含むのに対し、et-受動構文は動作主および行為セグメントを排除する。et-受動構文は、動作主を参与者リストから削除することによって、事象発生及び主題の変化は表現するものの、結果状態までは含意せず、状態変化セグメントのみに際立ちが与えられる。これを図2に図式化する。

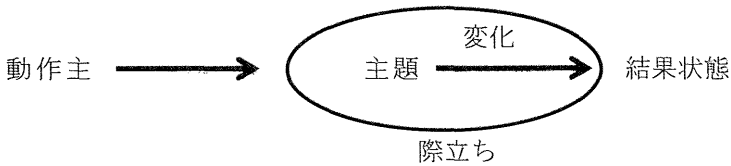


図2 : et-受動と行為連鎖

## 5 受動分詞

### 5.1 受動分詞構文の特徴

動作主の脱焦点化の機能を持つEAの構文には、不特定動作主構文（能動文的構文）およびet-受動構文のほか、受動分詞による受動表現がある。EAの受動分詞はSAにも存在し、伝統文法では名詞相当として分類されている。受動分詞はSAとEAでともにほぼ同様の特徴と機能を持つが、派生形態上の違いが存在する。受動分詞の主な機能は主題の結果状態を表す(Xrakovskij 1988)。受動分詞構文でも、動作主を文中に表現することはできない。

(18) a *el-bāb maftūḥ `ala-mesra`aihi*

def-door part.open completely

ドアが完全に開いている（全開の）状態にある。

b *el-rāgel*      *ma'ūl*      *ba'ālo*   *yomain*  
 def-man      part.kill      ago      2 days  
 その男が殺された状態で二日経つ。

上記の例文では、*ma-ftūḥ* 「開けられる」、*ma'ūl* 「殺される」がそれぞれ受動分詞に当たる。これらの分詞は「である」または「ている」という結果状態を表す。そのため(18a)は「ドアという主題が開けられた状態にある」ことを、また(18b)は、「主題である男が殺されている状態にある」ことを示す。

受動分詞は行為セグメントをスコープ外に置き、結果状態のみを表現するが、これはet-受動構文の機能と興味深い対照性を示す。例文(19)を見てみよう。

- (19) a \* *matbūḥa*      *fda'aye'*      一受動分詞構文  
           part.cook    in.minutes  
           数分で調理してある (状態のもの)。  
       b *et-tabeḥet*                      *fda'aye'*      一et-受動構文  
           intr-cook.3sing.fem.perf.    in.minutes  
           数分で調理された。

これらの例文ではそれぞれ*tabaḥ* 「調理する」という動詞と、行為プロセスを表す副詞句*fda'aye'* 「数分で」が用いられている。(19a)の受動分詞*matbūḥa* 「調理されている状態のもの」は*fda'aye'* 「数分で」とは共起しないが、(19b)のet-受動構文ではこの副詞句の出現が容認される。et-受動構文が、受動分詞と異なり、事象の発生や主題の変化を表現するためである。

一方例文(20)はこれとは反対の振る舞いを示す。

(20) a matbūḥa men embāreḥ —受動分詞構文

part.cook from yesterday

昨日から調理してある (状態にある)。

b \* et-tabaḥet men embāreḥ —et-受動構文

intr-cook.3sing.fem.perf. from yesterday

昨日から調理した。

状態の成立時点を表現する副詞句 *men-embāreḥ* 「昨日から」は(20a)の受動分詞構文と共に起すが、(20b)の *et-*受動構文とは共に起さない。これは受動分詞構文が結果状態のみを表現する機能を持つ、という特徴を裏付けるものと言える。

## 5.2 受動分詞と行為連鎖

受動分詞は、主題および主題が被った変化の結果状態を表す。これを図式すると図3のようになる。

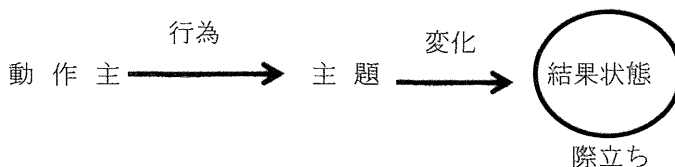


図3：受動分詞と行為連鎖

ここでは動作主、行為セグメントはこの構文が表現するスコープの外に置かれているため、これらの存在を含意する語彙とは共に起できない。これによって示される結果状態の成立過程には、動作主や外的な原因は含意されない。

## 6 まとめ

本稿では、EAにおける動作主の脱焦点化を実現する3つの構文を扱った。1つ目は不特定動作主構文である。



上記の3つの構文は*Samra*が殴られた、という事象を表している。しかし、それぞれの、動作主の焦点化の仕方、動作主の意識のされ方、構文の本質は異なる。まず(21a)の不特定動作主構文は能動態を取り、場所句などの、動作主と対象の関係・動作主の所属などを示唆する句が必要となる。動作主の属性を指定する句が付与されることで、動作主の存在が強く示唆される。また、事象における「行為」に焦点を当てるため、この例文では、ある意図的な動作主によって「殴る」という行為が行われたことを表す。

次に、(21b)のet-受動構文では、(現実世界では動作主がいなくては実現できないが) 構文の参与者リストからは動作主が削除されている。事象の発生と対象の変化を表すのは、et-受動の本質的な機能であり、ここでの脱焦点化は動作主の削除という方略が採られる。(21b)は、動作主が削除され*darb*「殴る」という事象が発生し、それによって、対象*Samra*が何らかの変化を被った事態を描写する。

最後に受動分詞構文(21c)は、対象の結果状態のみに焦点が当てられ、焦点化される行為連鎖のスコープ内から動作主が削除されている。(21c)は、動作主の存在より、主題が「殴られる」という行為によって影響を受け、その影響による結果の残存、つまり身体的または精神的な痛みや傷が残っているという解釈になる。受動分詞は影響のない行為とは相性が悪く、殴られた対象に影響が残存していない場合には、例(22)のように不自然または不適格になる。

(22) \* *heiya met'awwara, bas haff-et*  
 she part.hurt but heal.3sing.pst-fem  
 彼女は怪我しているが、もう治った。

そのかわり、これを(23a, b)のように不特定動作主構文やet-受動構文で置き換えることはできる。

## (23) a 不特定動作主構文

`awwar-ū-ha f-el, reḥla,  
hurt.tr.pst-3pl.nom-3sing.fem.acc, in-def excursion  
bas ḥaffet  
but heal.3sing.fem.

直訳：(彼らが) 遠足で彼女に怪我をさせたが、もう治った。

意訳：彼女は遠足で怪我させられたが、もう治った。

## b et-受動構文

heya et-`awwar-et, bas ḥaff-et  
she intr-hurt.3sing.pst-fem, but heal.3sing.pst-fem

彼女は怪我したが、もう治った。

これら(22)と(23)で示した各構文は、いずれも動作主の脱焦点化機能を持つが、動作主の存在に対する焦点化の度合い、および事象自体をどのようなイベントとして概念化しているかで異なる。

以上、EAの動作主脱焦点化を実現する構文が3つあることを述べ、それぞれの脱焦点化の特徴と機能の違いを考察した。

## 【省略記号】

acc = accusative, caus = causative, def = definite particle, fem = female,  
gen = genitive, Impr = imperfective, Intr = intransitive marker, ml = male,  
neg = negative marker, nom = nominative, part = (passive) participle,  
pass = passive, perF = perfective, pl = plural, poss = possessive,  
prog = progressive, sing = singular

【参考文献】

- Abdel Massih, Ernest T. (1979) *A reference grammar of Egyptian Arabic*.  
Washington: Georgetown University Press.
- Croft, William (1991) *Syntactic categories and grammatical relations*.  
Chicago: the University of Chicago Press.
- Lyons, John (1968) *Introduction to theoretical linguistics*. New York:  
Cambridge University Press.
- Shibatani, Masayoshi (1985) 'Passives and related constructions: A prototype  
analysis' *Language* 61, 821-848.
- Xrakovskij, Viktor (1988) 'Resultative and passive in Arabic'. In: Bernard  
Comrie (ed.) *Typology of resultative constructions*, 327-339  
Philadelphia: John Benjamins.
- Watson, Janet (2002) *The phonology and morphology of Arabic*. New York:  
Oxford University Press.

# Perspectives on agent defocusing strategies in Egyptian Arabic

Eba HASSAN

This paper outlines some possible types of agent defocusing constructions in Egyptian Arabic. In this paper, three kinds of constructions are defined to have a common ‘agent defocusing function’, but they differ in their degree of defocusing and in the elements focused on. A descriptive analysis was carried out on these constructions to find out the semantic differences.

- (1) The vague agent construction: It has no overt subject, and the verb agrees with 3<sup>rd</sup> person plural subject. It describes a situation brought about by a volitional agent.

This construction defocuses the agent by making it an indefinite identity, but highlights the action itself.

- (2) *et*-prefix construction: In this construction, the *et*-prefix used in producing the inchoative counterpart from the causative/intransitive verb is used. It is also used in making the passive voice out of the active one, by attaching the *et*-prefix to the transitive verb.

This construction demotes any agentive existence, and blocks any adverbials that express the agent or its identity. On the other hand, it highlights the *event* itself and the changes that occur to the theme.

- (3) Passive participle construction: A passive participle is used in this construction. As a consequence, it is more closely adjectival than verbal. It expresses the resultative state of the theme, and demotes any other agentive or eventual elements by blocking their appearance within the construction.



*Doctoral program in linguistics*

*University of Tokyo*

*3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902, Japan*

*E-mail: ebahssn@gmail.com*